総　記

佐藤喜代治

（一）

昭和四十一年春、「国語学」編集の責任を負はされてから今まで二年、学界の一隅にあつて事情に疎い者が、ともかく任期を終へることができたのは、ひとへに、築島裕氏ほか、編集委員の方々、並びに会員の方々の御協力によるものと、感謝のほかはない。

この二年間を顧みて印象に残る最も顕著な事実は、学会の大先輩が相次いで遠逝されたことである。昭和四十一年も終りに近づいた十二月十八日、東条操氏が逝去された。方言学の草分けとして「国語の方言区画」「全国方言辞典」を始め、数多くの著述を公にされ、数多くの後進を導かれ、更に、国語学全体の発展に貢献された大きな功績は改めて述べ立てるまでもない。それだけ、その逝去を惜しむ心も大きく、それはひとり方言研究者には限らないのである。「国語学」は第六十九集の大半を追悼のためにささげた。

四十二年六月、金沢庄三郎博士が逝去された旨が伝へられ、それから間もなく、八月十七日新村出博士が世を去られた。金沢博士の名は「広辞林」と共に古く、なじみ深いものである。新村博士が学界の先達として残された業績は枚挙にいとまなく、その文章は滋味あふれることばに満ちてゐる。功成り名遂げて、静かに寿を養つてをられることと拝察してゐたのであるが、その遠逝を承つて、巨星墜つの感を深くするのである。

相次ぐ訃報に暇もおかず、同年秋十月、時枝誠記博士の御逝去の報に接して、全く言ふことばを知らなかつた。病床にあると聞いてゐた博士が元気を回復して、学会の会合にも出席され、我々を喜ばせたが、やがて病魔のために再び帰らぬ人となられた。時枝博士が橋本進吉博士の後を受けて国語学会の代表者となり、戦後二十年の間、学会のために尽力された功労を我々はいつまでも忘れることができないであらう。また、その言語過程説は学界に、大きな波紋を投じ、ソシュールによつて明確にされたかに見えた言語の概念について、我々は、さらに考へ直すことを促された。その学説をめぐる論議は今後もまた続けられることであらう。時枝博士は単に理論の人ではなく、国語教育や国語問題など、実際の問題についても活躍された。博士のやうに、深く言語の本質を究めるだけでなく、更に実際問題に考察を及ぼす人が得難くなつてきた現在において、単に

博士の死を悼むといふだけでなく、国語学のあり方といふものをここで改めて考へてみる必要があるのではなからうか。時はしばらくも休むことがない。学問も絶えず転換飛躍を求められてゐるやうに思はれる。

金沢・新村両博士のために、私ども編集委員は追悼記事を企画し、金沢博士のためには時枝博士の原稿をいただいたのであるが、やがて「国語学」第七十二集は時枝博士の追悼号となつた。岩淵代表理事のほか、西尾、土井、服部三氏の追悼のことばと、十三編の論文とは博士の多面的な活躍をしのぶよすがである。

(二)

この二年間を顧みて、これをその前の二年間と比べ、どのやうな特色が見られるか、その傾向を簡単に言ひ表はすことはできない。見方によつては、前の時期の延長発展として前の時期にすでに現れてゐた傾向が一層濃厚になつてきた、そしてそれが徐々に学問の質を変へつつあると言ふことができるかもしれない。

この二年間にも雄篇・大著といふべきものが引続き公刊された。それらには、多年にわたる研究の成果もあり、新進の学者の力作もある。

京都大学国文学会の「国語国文」は、昭和四十一年五・六月号が遠藤嘉基博士の還暦を記念して、「国語学論集」として刊行された。四十に余る論文を集めた、堂々たる偉容は遠藤博士の功績をたたへるにふさはしいものである。また、沢瀉久孝博士の喜寿を記念した「万葉学論叢」には上代語に関する論文が多く収められてゐる。そのほか、各時代について、業績の主要なものをあげれば、上代語に関しては、北条忠雄「上代東国方言の研究」(41・3)、佐伯梅友「上代国語法研究」(41・12)が出た。文章に関するものには西尾光雄「日本文章史の研究　上古編」(42・3)がある。特に注目されるのは「時代別国語大辞典　上代編」の出現である。時代別国語辞書あるいは歴史的国語辞書といふべきものが今まで存在しなかつたことは重大な欠陥であり、その実現は久しく待望され、またその企画も以前から耳にしてゐたのであるが、本書がその首巻として公刊されたことは誠によろこばしいことである。編集に携はつた人々の労を多としたい。古代・中世については、小久保崇明「大鏡の語法の研究」(42・3)、松尾拾「今昔物語の語法の研究」(41・3)、桜井光昭「今昔物語集の文体の研究」(42・11)がある。訓点語については築島裕「興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究」が「研究編」(42・3)によつて完成し、また小林芳規「平安鎌倉時代における漢籍訓読の国語史的研究」(42・3)が出たほか、「訓点語と訓点資料」第三十二輯(41・2)が、これも遠藤嘉基博士の還暦記念号として出された。近世・近代については、真下三郎「遊里語の研究」(41・3)、杉本つとむ「近代日本語の新研究」(42・9)などがあり、現代語では国立国語研究所の報告として「戦後の国民各層の文字生活」(41・3)が出たほか、荒川惣兵衛「外来語辞典」(42・9)は、同氏が昭和十六年に「外来語辞典」を出した後、更に戦後苦心を重ねた末に出されたものである。なほ、辻村敏樹「現代の敬語」(42・11)が出た。

以上のほか、注目すべきものに山田忠雄編「本邦辞書史論叢」(42・2)がある。各時代の辞書のほか語彙に関する論文二十一編を収めてゐるが、いづれも力作で、今後の辞書・語彙の研究に資する

ところが大きいであらう。また、通史的なものに此島正年「国語助詞の研究―助詞史の素描」（41・3）がある。「日本語の歴史」（平凡社）全七巻完成の後を受けて、附巻「言語史研究入門」（41・6）が出た。国語史研究の方法を心得るための適切な手引である。なほ、阪倉篤義「語構成の研究」（41・3）、金田一春彦「日本語　音韻の研究」（42・3）、森重敏「文体の論理」（42・3）などの書が出、また、時枝博士監修の「講座　日本語の文法」（全四巻）が、昭和四十二年末までに三巻の刊行を見た。時枝博士にとつては、単に時枝文法でなく、日本文法そのものの体系を展開すべき、意欲的な事業であつたやうであるが、その完成を待たずに世を去られた。

方言関係では、国立国語研究所が、多くの研究者の協力を得、多くの年月を費して準備を進めてきた「日本言語地図」の第一冊（41・3）および第二冊（42・3）の刊行を成し得たことをまづ特筆しなければならない。このほか、平山輝男氏らの「琉球方言の総合的研究」（41・3）、「琉球先島方言の総合的研究」（42・3）があり、また山田実「南島方言与論語彙」（42・1）は、記述のし方に問題があるにしても、重要な資料を提供したものである。また、広島大学の方言研究刊行会から出てゐる「方言研究年報」は第十巻を数へるに至つた。

以上の著述については、「国語学」その他で、すでに書評が行はれ、新刊として紹介の行はれたものがある。また、「国語学」で書評または新刊紹介を行ふ予定になつてゐるものも少なくないが、編集責任者として心苦しいのは、任期中にその計画を十分に実行し得なかつたことである。これを、仮りに第三者として見るとすれば、書評や新刊紹介を企画しながら、容易にさばききれないほど、すぐれた述作が続出するといふ事実は、学問の発展、学界の繁栄を示すものであつて、まさに慶賀すべきことである。これは、一つは出版事情の好転によるものと考へられるが、それだけ我々として自ら戒めなければならないのは、学術刊行物の量が多いことを誇るだけではなく、質の向上に努めなければならぬといふことであらう。同時に、次々と刊行される長編大作がいつたいどれだけ研究者の間で、あるいは一般の人々に読まれてゐるかといふ問題がある。私自身の乏しい経験で言へば、国語学の研究者が少なく、専門書の少なかつた時代には、新刊の図書・雑誌論文をたいてい一読することができたが、最近ではそれが全く不可能になつた。我を以て人を推すのは失礼極まることであるが、ひそかな疑問を除き得ないことも偽りのない事実である。この点に思ひを致す時、紹介や批評を一層盛んにする必要があるのではないかと考へるのである。

雑誌・紀要類に載つた国語学関係の論文も数多く、二年間で数百編に達すると思はれる。それらの紹介・批評は本誌における各分野の展望に譲つて、ここではふれないことにする。また、それぞれの内容は、「国語学論説資料」が刊行されることになつたので、それによつてまとめて知る機会があることと思はれる。多数の論文の中には理論的な研究も、実証的な研究もまじつてゐる。実証的研究は、事実の究明がいよいよ綿密詳細になつてゆく。言語の研究は、当然、言語の事実に基づいて行はれるべきであるが、さりとて、実証的研究が、それを行ふ意味を顧慮することなしに、単なるせんさくに終始してならないことは言ふまでもない。言語の研究であり、国語の研究である限り、言語の本質、国語の特質にどんな点でつながるかを考慮して事実の調査研究を進めるべきである。しかしま

た、言語の本質、国語の特質につながる限りにおいては、どんな調査でも、どんな研究でも、言語学または国語学の名に値するものと考へられる。細かい事実のせんさくが、その事自体のゆゑに学問でないと断定することはできない。学問といふ以上、何らかの点で理論がなければならぬであらうが、それはやはり事実の裏づけを必要とする。さういふ意味では、たとへ細かいことでも、着実な研究はそれとして意味をもつものと考へられる。言語の事実に基づかない、抽象的な理論が学問の進歩に役立つことはない。変形文法の理論を日本語に応用することも、この二年間に幾度か試みられてきたが、それが十分の説得力をもたないのは、この理論によつて日本語の事実を、従来の理論に比べて更に適切に正しく説明し得るといふことが明らかでないからである。もちろん何度も試行錯誤を繰り返すことによつてその正しさが明らかになることが無いとは言へないが、それにはもつと多くの時日が必要であらう。

(三)

資料・索引などの刊行は、近来ますます盛んに行はれるやうになつた。小島幸枝「校本 どちりなきりしたん」(41・1)、亀井高孝・阪田雪子「ハビヤン抄キリシタン板平家物語」(41・10)、また京都大学国文学会「交隣須知 本文・解題・索引」(41・6)、三木幸信「義門研究資料集成 上」(41・8)などが刊行された。また、中田祝夫・北恭昭「倭玉篇 研究並びに索引」(41・6)、山田忠雄(監修)「春風館本諺苑」(41・9)、大塚光信「コリャード羅西日辞典」(41・11)など、辞書類の複製も行はれて、得難い資料が自由に利用できるやうになつた。ヘボンの「和英語林集成」初版(41・10)や、サトウの Kuaiwa-Hen (42・11)の複製も出た。辞書類の複製によつて研究の便宜を加へたことは量り知れないものがある。が、それらの辞書の性格をよく吟味することなく、機械的に利用するところには弊害も生ずるので、その利用は慎重にしたいものである。方言についてはNHKの「全国方言資料」全九巻が公刊されて、広く利用し得るやうになつた。

索引の刊行も相次いで行はれ、中村啓信「日本書紀総索引 漢字語彙編第三巻」(41・3)、鎌田広夫「堤中納言物語総索引」(41・9)、日本大学国文学研究室「土佐日記総索引」(42・7)、松村博司(監修)「枕草子総索引」(42・11)などのほか、その数は少なくない。なかんづく島田友啓氏の「古字書索引叢刊」は既刊十一冊に達し、「色葉字類抄漢字索引」は四冊を数へてゐる。今後の続刊が期待されるが、同氏の健闘をたたへたい。索引の作成はいづれも多大の苦労を伴ふものと思はれるが、その刊行は研究者にとつてありがたいことである。ただ、辞書と同じく、索引にだけたよつて本文をおろそかにすることがあつてならぬことは言ふまでもない。一方、種々索引が輩出するにもかかはらず、出るべくして出ない索引、たとへば西鶴・近松などの索引も計画されて然るべきではないかと思ふ。

(四)

学会の活動としては、昭和四十一年五月、国語学会総会が明治大学和泉校舎で行はれた際、森重敏、藤村靖両氏を講師として、「文法における意味の問題」を主題とするシンポジウムが行はれたが、両氏の論旨に隔たりがあつて、問題は煮つめられないままに終つた。同年八月末に札幌市で藤原与一・五十嵐三郎の両氏を講師とす

る公開講演会のほか、研究発表会が開催された。折からの暑さは内地から持ち込んだ趣があつたが、地元の方々の熱心な準備・接待があつて、にぎやかな学会であつた。昭和四十二年度の国語学会総会は慶応大学三田校舎で催され、松村明・沢田允茂両氏の講演のほか、この年度から春にも研究発表会が行はれることになつた。この年の秋十一月、神戸の親和女子大学で国語学会が開かれ、研究発表と共に、遠藤嘉基・阪倉篤義両氏の講演が行はれた。学長である遠藤氏の御配慮により新しく美しい校舎で、快適な二日間を過したが、ここも盛況であつた。この前後三回の研究発表を通じてみて、研究発表の申込は決して多いとは言へない状態であつた。一つは、最近、種々の学会が多い上、それぞれ機関誌をもつてゐて、発表すべき機会に恵まれてゐることが考へられるし、一つはまた、国語学の、特に、実証的な研究の発表を口頭で行ふことが困難だといふ事情もあらうかと思はれる。しかし、多数の会員を擁する国語学会としては、会員が互ひに研究発表に対してもつと積極的であつてもいいやうに思はれる。たとへば、異論の多い文法の問題について直接に詳しく討論し合ふ機会があつていいのではないかと思ふ。

国語学会のほか、日本方言研究会は昭和四十一年東京での研究発表会の後、四十二年には仙台および広島で研究発表会を行つた。また、訓点語学会は四十一年、神戸、親和女子大学で、四十二年、東京と奈良とで、計量国語学会は四十一年、東京で、四十二年、京都で、それぞれ学会を開催してゐる。近代語学会は「近代語研究」第二集（42・1）を刊行した。言語学会、その他の学会でも国語学に関する研究発表が行はれてゐる。学問が次第に発展分化し、それぞれの分野における研究者が増加するにつれて、各種の学会がその数を増してゆくことも当然であるが、同時にそれらの総合連絡といふことも、今後は考へてゆく必要があらうと思はれる。

海外との学術交流も盛んになり、四十二年の夏には、変形文法の首唱者チョムスキー教授をわが国に迎へて、言語学のセミナーが行はれた。このやうな情勢の下で、国語と限定せず、言語そのものに対する関心が高まつたことが、その二年間において注目すべき重要な動向であると言つてもいいやうに思はれる。わが国の学者で海外におもむく人々も時と共に多く、この二年間にも水谷静夫・馬淵和夫・阪倉篤義・松村明・辻村敏樹・亀井孝などの諸氏が往来され、昭和四十二年夏にアメリカのミシガン大学で催された東洋学者会議には平山輝男氏・小山敦子氏などが参加された。東西の交流は今後一層頻繁になることが予想される。従来、国語学は言語研究の一部門として言語学と密接な関係があるはずであるが、実際には、国語学と言語学とはそれぞれ別の世界に住んでゐたといふ印象が強い。東西の交流が盛んになるにつれて、その弊も除かれるやうになることであらう。もちろんそれぞれ対象を異にする国語学と言語学とを安易に結びつけることは厳に戒めなければならないが、国語学者もその視野を広げる必要があることは言ふを待たない。

（五）

この数年間の間に、ベビー・ブームが大学にまで及び、大学の新設や学部・学科の増設が各地で相次いで行はれた。国文学科で新設され、また拡充されたものも相当の数に達すると見られる。それらの大学には国語学担任の教官が配置され、それに伴つて研究者の異動も少なくなかつた。これを全体として見れば、国語学の発展向上

のためによろこぶべきことと言はなければならない。しかし、このやうに、国語学担当の大学教官が全国的に増加してゐる現状では、後継者の養成といふことがやがて切実な問題となることが予想される。研究者の養成は一朝一夕でできることではなく、特に、国語学の場合は、国文学や英文学に比べて、研究者を養成することが困難である。この問題は、従つて、学界全体の問題として考慮する必要がある。それには、遠回りのやうであるが、一般に国語に対する関心を高めてゆくこと、国語に対する自覚を深めてゆくことが重要ではないかと考へられる。また、このことは、決して研究者の養成のためにだけ重要だといふわけでない。この点を考へれば、末端のところで意見を戦はすことも決して無意味とは言へないが、互ひに根本に立ち帰つて、国語そのものについて深く思ひを回らす必要があるのではないかと思ふ。このことが、私の思ひ過ごしにすぎないといふことであれば幸ひである。

―東北大学文学部教授―